

# 大学院修了にあたって

## 大学院修了にあたって

歯周診断・再建学分野 岩 永 璃 子

高校卒業後、新潟大学歯学部歯学科で学生として6年間、総合診療部で研修医として1年、そして歯周診断・再建学分野で大学院生として4年間、計11年間この新潟大学で勉強させていただきました。私の人生の3分の1以上、この新潟大学歯学部でお世話になりましたが、振り返ってみるとなんだかあっという間に過ぎたような気がします。

しかし、特に大学院4年間は人生の大きな転機となったような気がします。4年前、私は歯周診断・再建学分野に入局しました。大学院の試験の時くらいしか論文もほとんど読んだこともない私は、研究については右も左も分からないような状況でした。「でもきっと誰かが優しく教えてくれるだろう。」そんな甘い考えは、大きな間違いでした。私の場合は1年生のときから学位論文のための実験データの収集が必要でしたが、「何からやっていたか分からない……。」途方にくれた毎日がいざばらばらと続きました。呆然と過ごしていた私を見かねて手助けしてくれた先生のおかげで、実験を少しずつ始めることができましたが、臨床と研究をうまく両立することが難しく、ほとんど眠れないような日々が数ヶ月続きました。怠慢な私は、思えばこの人生で、眠る時間も惜しんで何かを続けるということは全くといっていいほどありませんでした。身体的にも精神的にも非常に苦しい毎日でしたが、とにかくやるしかない、と毎晩ピペットを握っていました。4年間の中で1年生の時が特につらかったのですが、あの経験は私を精神的にとっても強くしました。

2～4年生では国内学会での発表を4回（新潟歯学会を含む）、海外での学会発表を1回行う機会をいただきました。もちろん、研究発表をするのは初めての経験で、ポスター制作もままならず何

度も作り直しました。しかし、この学会発表によって分かりやすくプレゼンする力が身についた気がします。同時期に論文を作成しましたが、自分で英語論文を作成するなんて、本当にできるのだろうかと思いましたが、なんとかクリアすることができました。これらの経験は全て自分の自信につながりました。

自分で考え、自分で動き、最大限に努力する。一見当たり前のことですが、4年前の私には全くできていなかったと確信します。これからの人生でとても大切なことをこの4年間で学べたと思っております。このような素晴らしい経験の機会をくださった吉江先生をはじめ、指導医の杉田先生、小林哲夫先生、先輩、同輩、後輩全ての皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

## 大学院修了にあたって

顎顔面口腔外科 大 貫 尚 志

まさかまた歯学部二ニュースの原稿依頼が回ってくるとは。歯学部入学時にも書かせてもらって学生生活の締めくくりとしてまた巡ってきたことは何か運命的なもの？を感じるころである。今回は、大学院修了するにあたってというテーマですが、私は、大学を卒業した当時大学院へ進学する気は全くなかった。口腔外科を勉強したいと思い、研修医として顎顔面口腔外科と長岡赤十字病院口腔外科に半年間ずつお世話になったので、その後数年口腔外科で勉強させてもらえればと思っていた。さらに、歯学部入学に至るまでに遠回りをしており、早く臨床技術や経験を積みたいと思っていたからである。ところが、少し甘い話に乗ってしまって大学院進学することになった。しかし、結果的には良い経験をさせてもらったと思っている。この4年間のことについて振り返りたいと思う。

1年目は口腔外科で病棟、外来、麻酔科をローテーションしていたが、研究の方は口腔解剖学で研究できるように高木先生から前田先生に頼んで頂いた。2年目から本格的に研究が開始された。そして、そこには運命的な出会いが待っていた。泉先生との出会いである。泉健次先生がアメリカから帰国されて口腔解剖学の准教授で着任された頃で大学院生を欲しがっているということで幸いにもケンジ先生に弟子入りすることができた。さらに、ケンジ先生の弟子として口腔再建外科の加藤寛子先生がいた。歯学部からの同級生で彼女のことはよく知っていたが、研究に対する姿勢は凄かった。いつも遅くまで実験をし、休日も頑張っている彼女に触発され、ここまで頑張れたと思う。

さて研究のテーマであるが、歯科で非常に問題となっているビスフォスフォネート関連顎骨壊死について研究することとなった。ビスフォスフォネート製剤を投与されている患者に抜歯などの観血的処置を行うと顎骨壊死を起こすことがある。このため、骨に対する作用に関する研究が多く見られる。しかし、観血的処置の既往がなくとも発症することがあるため、私たちは軟組織にも影響を及ぼすのではないかと考え、口腔粘膜上皮細胞に対する作用について研究を行った。少しずつ結果が出始め、大学院3年目に研究成果をスペイン・バルセロナで開催されたIADRで発表する機会を頂いた。初めての国際学会でさらに口頭発表ということで非常に緊張したことと、質疑応答がチンプンカンプンでケンジ先生に助けてもらったという苦い思い出が残っているが、学会参加という機会に恵まれたことに感謝している。また、英語の重要性を改めて感じた。発表後もケンジ先生が外国の先生とディスカッションしている姿には衝撃を受けると同時にいつかは私もと思った。

大学院生活が終了して、これから臨床中心の生活となっていくが、大学院で学んできた知識や経験、考え方を臨床の場でも活かしていければと思っている。4年間を有意義に過ごせたこと、大学院修了することができるのは、私ひとりではなく、私を支えて下さった、たくさんの先生方や家族がいたからである。本当に感謝している。遅ればせながら、今後進むべき道のスタート地点に

立った気がする。今後はより一層努力して参りたいと思っている。

## 大学院修了にあたって

歯科矯正学 焼田裕里

月日が流れるのは早いもので、矯正科に入局してから4年が過ぎようとしています。今思えば、あつと言う間だった気がします。自分以外の周りの環境の変化を考えると、長い年月だなとしみじみ感じます。

私の大学院時代についてですが、矯正科では、自分の興味ある分野を研究テーマにしてよいということでしたので、1年目は、まず外来見学をしたり、新人教育を受けたり、医局の先生方と交流を深めながら、矯正の知識を深め、自分は何が知りたいだろうということを考えながら、毎日を過ごしていました。自分の中で、いくつかの新人ながらの思いつきもありましたが、それをテーマにすると4年間では難しいという意見もいただいたり。では、どうしたらいいんだろう？と人に相談したところ、とりあえず、医局の先生がどんな研究をしているのかを、実際に見せてもらったか？とアドバイスをいただき、研究見せてくださいと先輩に見せてもらったのが、結果として私の大学院のテーマとなった、「顎矯正前後の顔面軟組織三次元形態の変化様相について」に関するものでした。最初は、治療前の患者様への説明時、三次元シミュレーションを提示できたらカッコイイかもと、少しミーハーな気持ちで始めたのは事実です。しかし、パソコンが得意とは言えなかった私には、データの統合がうまくいかない、ファイル形式を間違える、エクセルのデータとの組み合わせなど、私には向いていない研究を選択したのではと、悩むことも多くありました。しかし、たくさんの先生のご指導のもと、なんとか4年間やっていくことができました。むしろ自分の不得意分野の研究は、大学院でしかできなかったのではないかと、今では前向きに思っています。

臨床面では、師匠や周りの先生にご指導いただきながら、1年目は、見学、アシスト、技工や診

断などから経験していき、2年目からは少しずつ自分の担当患者様の診療を経験してきました。患者様の月に一度の来院時、自分が予測した通りに歯が動いてくるとよしよしと心の中でガッツポーズをし、予測と異なる動きだとその原因について考察する。それが楽しく、今後も、もっと様々な症例を経験していけたらと思います。

大学院4年間の生活においては、齋藤教授はじめ、医局の先生方、日本歯科大学新潟生命歯学部歯科矯正学講座寺田教授、外来スタッフの方々の

支えがなければ成り立つことはなかったと、大変感謝しております。

結局、新人時代に考えていたテーマについては未だスローペースな進行ですが、この4年間で、あるテーマについていかに調べ、いかに分析し、いかに考察していくかということのスキルを得られたと考えています。大学院を経験したことで、今後も研究、臨床、生活において、スキルアップ目指して精進していきたいと思います。



## 平成23年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名(専攻)	博士論文名
博士(歯学)	牧野由佳 (口腔生命科学)	Association Between Volatile Sulfur Compounds and Periodontal Disease Progression in Elderly Non-Smokers. (非喫煙高齢者における口腔内揮発性硫黄化合物濃度と歯周疾患進行の関係)
博士(歯学)	若松里佳 (口腔生命科学)	Direct time-lapse visualization of antimicrobial action of four mouthrinses against <i>Streptococcus mutans</i> biofilms ( <i>Streptococcus mutans</i> バイオフィルムに対する四種の洗口液の抗菌効果のリアルタイム解析)
博士(歯学)	石井里加子 (口腔生命科学)	ブラッシング時の歯ブラシ運動および荷重の同時解析—歯科衛生士のブラッシング—
博士(歯学)	ROSALES ROCABADO JUAN MARCELO (口腔生命科学)	Osteoblastic Differentiation and Mineralization Ability of Periosteum Derived Cells in Comparison to Bone Marrow and Calvaria derived cells. (骨膜由来細胞の骨芽細胞分化能、石灰化能の評価—頭蓋骨由来骨芽細胞、骨髄間質細胞との比較研究—)
博士(歯学)	五十嵐友樹 (口腔生命科学)	Permanent dentition after soft palate closure by Furlow's method in two-stage palatoplasty. (二段階口蓋形成手術法において Furlow 法による軟口蓋形成を施行した片側性完全唇顎口蓋裂児の永久歯列弓形態)
博士(歯学)	大貫尚志 (口腔生命科学)	Zoledronic acid induces S-phase arrest via a DNA damage response in normal human oral keratinocytes. (ゾレドロン酸はヒト口腔粘膜上皮細胞に対して DNA 損傷を介する S 期停止を誘発する)
博士(歯学)	村山正晃 (口腔生命科学)	Study on the anti-HIV-1 activity of oral fluid by quantitation of RNA cleavage. (RNA 切断の定量化による唾液の抗 HIV-1 作用に関する研究)
博士(歯学)	山口花 (口腔生命科学)	Irsogladine maleate ameliorates inflammation and fibrosis in mice with chronic colitis induced by dextran sulfate sodium. (マレイン酸イルソグラジンは、デキストラン硫酸ナトリウム誘起慢性腸炎マウスの炎症と線維化を改善させる)
博士(歯学)	富所慶子 (口腔生命科学)	歯科衛生士による介護職員への歯科保健指導および専門的口腔清掃が要介護高齢者の口腔内環境に及ぼす効果
博士(歯学)	岩永璃子 (口腔生命科学)	<i>FcγRIIb</i> polymorphisms, periodontitis and preterm birth in Japanese pregnant women. (日本人妊婦における <i>FcγRIIb</i> 遺伝子多型、歯周炎と早産の関連性)
博士(歯学)	清水英寿 (口腔生命科学)	Effects of Orally Administered Lactoferrin and Lactoperoxidase-Containing Tablets on Clinical and Bacteriological Profiles in Chronic Periodontitis Patients (慢性歯周病患者においてラクトフェリンおよびラクトペルオキシダーゼ含有錠剤の経口投与が臨床的および細菌学的側面に及ぼす効果)
博士(歯学)	宮下博考 (口腔生命科学)	Relationship between serum antibody titres to <i>Porphyromonas gingivalis</i> and hs-CRP levels as inflammatory markers of periodontitis. (歯周炎患者における <i>Porphyromonas gingivalis</i> に対する血清抗体価と高感度 CRP の関連性)
博士(歯学)	横山智子 (口腔生命科学)	Proteomic profiling of human neutrophils in relation to immunoglobulin G Fc receptor IIIb polymorphism ( <i>FcγRIIIb</i> 多型に関連するヒト好中球プロテオミックプロファイリング)
博士(歯学)	丹原惇 (口腔生命科学)	Postoperative changes in mandibular prognathism surgically treated by intraoral vertical ramus osteotomy (下顎枝垂直骨切り術を施行した骨格性下顎前突症例における術後変化)

博士の専攻分野の名称	氏名(専攻)	博士論文名
博士(歯学)	焼田裕里 (口腔生命科学)	多変量解析を用いた下顎骨後方移動術後の三次元口腔周囲軟組織形態変化
博士(歯学)	吉居朋子 (口腔生命科学)	Immunoexpression of aquaporin-1 in the rat periodontal ligament during experimental tooth movement. (実験的歯の移動時におけるラット臼歯歯根膜のアクアポリン-1免疫発現)
博士(歯学)	ANWAR HUMAYRA BINTE (口腔生命科学)	Behavior of AQP-1 periodontal cells with aquaporin-1 immunoreaction during experimental tooth movement. (至適矯正力によるラット臼歯移動実験モデルの確立と矯正的歯の移動に伴うラット歯根膜アクアポリン1(AQP1)陽性細胞の動態)
博士(歯学)	塚野英樹 (口腔生命科学)	Individual-dependent effects of pharyngeal electrical stimulation on swallowing in healthy humans (ヒト咽頭電気刺激が与える嚥下運動への効果とその個人差)
博士(歯学)	林宏和 (口腔生命科学)	Biomechanical features of tongue movements during squeezing and swallowing in healthy humans (ヒト摂食時における舌運動の生体力学的特徴)
博士(歯学)	佐藤康仁 (口腔生命科学)	Disulfide bonds are critical for tissue-nonspecific alkaline phosphatase function revealed by analysis of mutant proteins bearing a C201-Y or C489-S substitution associated with severe hypophosphatasia (重症低フォスファターゼ症に関連した変異[C201Y, C489S]の解析から明らかになった組織非特異型アルカリフォスファターゼの機能におけるジスルフィド結合の重要性)
博士(歯学)	林頼雄 (口腔生命科学)	回転切削機器による歯科技工操作時における局所振動伝搬の加速度計による評価
博士(歯学)	真柄仁 (口腔生命科学)	Alterations in the immunoexpression of intermediate filaments in the disc cells of rat temporomandibular joint induced by loading an extraordinary compressive force. (ラット顎関節関節円板細胞における過大な機械的負荷に対する中間径フィラメント発現の変化)
博士(歯学)	加藤寛子 (口腔生命科学)	Alterations of cellular phenotype and epithelial characteristics by manipulating ALDH expression in normal oral keratinocytes (ALDH活性の薬理的な操作が口腔粘膜角化細胞形質と上皮組織に及ぼす影響の検討)



## 平成23年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻論文博士取得者

博士の専攻

分野の名称 氏名(専攻) 博士論文名

---

博士(学術) 高橋 英 樹 小規模作業所は何を形成してきたか ―法定化の分析から―  
(口腔生命科学)



## 平成23年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻修士課程修了者論文名

修士の専攻 分野の名称	氏名（専攻）	修士論文名
修士 (口腔保健福祉学)	横 塚 あゆ子 (口腔生命福祉学)	病棟看護師の口腔ケアに対する認識—とくに病棟別および臨床経験年数別の比較—
修士 (口腔保健福祉学)	岩 本 彩 (口腔生命福祉学)	リスク発見・保健指導重視型の成人歯科健診プログラムにおける口腔保健行動の変化
修士 (口腔保健福祉学)	長 部 麻 未 (口腔生命福祉学)	離島における地域のつながりに対する住民意識の世代間比較—ソーシャルキャピタルの概念を手掛かりに—
修士 (口腔保健福祉学)	塚 田 しげみ (口腔生命福祉学)	入院患者の歯科的介入の必要性を判断するためのスクリーニング用紙の開発—歯科医師と歯科衛生士のスクリーニング結果の比較—
修士 (口腔保健福祉学)	藤 田 玲 子 (口腔生命福祉学)	愛知県内の病院内併設歯科における経管栄養状態の入院・入所者に対する口腔清掃の実施状況に関する研究

